

住まいを巡るつながりのデザイン

平倉 直子（平倉直子建築設計事務所）

一時をつなぎ、暮らしをつなぎ、空間と空間をつなぐ

1. はじめに

設計した住宅のタイトルに“住まい”とつけるようになって7～8年になる。それは建築というモノを設計しているというより、そこで営まれる人の行為、コトの方をデザインしているという意識がより強くなってきたからである。季節や天候・時間によって建築が無限に変化するのと同じように、人の暮らしや考え方、興味を含む家族の関係は定かではなく、空間に働きかけてくる。何かと何かの間をつないでいくという関係性を考えることがデザインであり、動かないけれど生きている空間をつくることである。

建築家の住環境における役割

専用住宅を建築家が設計することは、不特定多数を対象としたり不変的なテーマを追求しようということから出発しているのではない。個人やそこに住む家族のため、あるいは与えられた敷地環境に対する特殊な解答を探索するものである。そうして、特殊な解答を求めて10数年、30数件を手掛けるうちに、それらは個人の閉ざされた嗜好の中にあるばかりではないと思い始めた。例えば東京近郊に土地を持ち住宅を計画できることは、それ自体大変恵まれているのだが、敷地の条件はなかなか厳しい。例えば60～100㎡の狭小地では住宅金融公庫の対象から外され（土地が細分化されて低層高密度化するのを防ぐ意味で100㎡以上）商品化住宅も対応する商品を持たない。そうした集合住宅並みの密度に対して、個性のみならず質を求めて選択肢を広げる意味で設計を依頼されるのである。敷地に多少のゆとりがあっても隣接地が上記のような条件であったり、簡易なワンルームマンションに囲まれ、接道条件もよくなければ同じことである。

設計のスタンス

都市にあっても日本の気候風土において内と外を緩やかにつなぎ四季折々の楽しみを取り入れ、工夫をこらして対処するつくり方に興味を持ち、建築と外部の空間をポジとネガの関係のように一対のものとして考えていくことが、結果として内部の空間を豊かにすると同時に街並・景観へ魅力的な提案をすることにもなると考える。あるいは個と家族の関係や様々なゾーンニングをどのように配置し、空間化するか。異質な物が出会う時、少しスピードを緩め、用心深く観察し少しずつ確かめていく

手順があると同時に、そこには未知のモノへの興味や思いがけない出来事による刺激もある。そして、そのような行動や気持を表現する面白さがある。

一方日常の生活の場として住まいをどう位置付けるかは一元的でなく、家族のあり方も多様化してきている。一生懸命利潤を生むために働いて、気がついてみると働けば働くほど我が家は職場から遠ざかり、職場や通勤電車で過ごすウェイトが大きくなっている。働くことが日常であって、日常生活の場と思われていた住居の中身はがらんどろ。それは塾通いの子供や女性の社会進出などそれぞれの理由で家族全体に広がり、更に都市施設の充実によって機能が都市へ拡散しているともいえる。このように原因は政治や経済・教育など社会や都市の構造と深く関わっているため、住宅の形式によらず共通する問題といえる。ライフサイクルやライフスタイルによる変化に対して、個々の住宅がどこまで対応できるように考えておくのだろうか。モノとしての寿命から考えればできるだけ長く対応するように計画しておきたいと思うが、始めから様々な状態を想定すればするほど重装備となる。子供が独立した後、残った両親は結局多くの物と空室の中で、それらを生かすわけでもなく生活することも多い。

特にバブルを経て街を見てみると、モノの耐久年数より地価価格の変動による影響や、相続による土地の分割が住み替えを進行させ、それにしても早く建て替えが行われているように感じる。こうした状況判断は、はなはだ感覚的な物の見方に偏るかもしれない。が、そういったことを調べてデーターを示したりある方向を模索することよりも、実際の設計を通して美しさや気持よさといった非常に感覚的なことも踏まえてそのバランスの中で1つの決断に至った結果を、経験を思い起こしながら表現してみるという作業が設計者の立場としてより大切なことと考え、分析することにした。

テーマは家族や暮らしについて10項目、環境について18項目をあげ、異質なモノやコトをどのようにつなぐかを考えることにした。そこから生き続け、使い続ける個から全体へ連続する視点に注目し、今後検討を要する点に焦点を合わせて、第3章ではそれらを総合して1つのケーススタディを示し、今後の住宅設計の課題について考察することにした。

2. 実例を検証する

2.1 PCパネル構造による5.4m×9mの空間…30畳

—NH92ウベハウス城山台の戸建集合

わずか120mmの厚さのPCパネルで30畳もの一室空間をつくれることは大変魅力的である。

商品化住宅ウベハウスへの都市型住宅の提案をしたのが1982年。その時は敷地の形状やレベルへ対応する方法としてPCパネルのブロックをいくつかに分け、その間を木や鉄骨造でつないだり、道路や隣地北側の斜線制限に対して、2FのPCパネルの臥梁^{がりよう}を鉄骨でつなぎ勾配屋根をかけて空間のボリュームをとりながら軒高をおさえ、敷地に対する建物の配置の可能性を広げた。そして内と外をつなぐ縁側やテラスなどを積極的にプランに取り入れ、居住性や暮らし方に対する提案もした。

その後、何LDKといった間取りや仕上げなど内部に向けられていた目を外部に転じ、美しい街並につながるような計画をすることが内部の暮らしを豊かにする計画になるという論を展開し、量産化を目標に1階をPCパネル造2階を木または鉄骨造で組み合わせた計画を提案し、数棟実現に至っている。2階を異種構造とすることで1階への荷重負担が軽減され、5.4m(6P)×9m(10P)を無柱の一室空間に作ることができ、これだけのスペースを構造に制限されことなく手に入れられることは、ライフサイクルやライフスタイルの変化に対応して容易に改

造を可能にすることにつながる。このような混構造は要素を単純化して生産性をあげる工業化住宅の方向とは矛盾するが、それまでも内装など地場の工務店との共同体制が組まれて生産されているので、比重を少し変えて対応することで、メンテや増改築への備えにもなりメリットはあると考える。そして、低コストながら1階を堅牢に対湿・防虫に優れた構造で固め、2階は軽く屋根形状と共に自由につくるといった耐久性・居住性にも優れた構造をもつ住宅は、PCパネルをオープン部材として誰でも扱うことができるようになればその可能性は広がる。

敷地に対して住棟配置の可能性が広がると、厳しい条件の中でも使える魅力的な戸外の計画につながる。このことは30畳の一室空間の改築に加えて、増築の余地も考えて計画をしておくことができることにもなる。実際に行われるかどうかは別にして、日々の暮らしの中でそういった可能性があるということが、住宅というモノに束縛されずに安心して気ままに過すことにつながる。初めから万全の準備を整えて過剰設計になるのではなく、小さく簡潔なものから、あるいは住み手の個性を加えながら徐々に作り上げていく楽しみがあればよいと考える。

この他にPCパネルの可能性をあげると、比較的基礎が簡単なので地盤を荒らさずに撤去できること、PCパネルの建て込みから解体のヒントがみえ、廃材を別の用途に再利用もできるのではと考える。

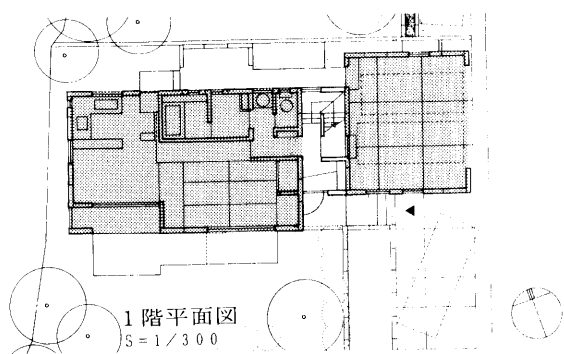


図-2.1 住居（6P×10P）と駐車場のブロックを分割する



写真-2.1-2 1階PC造+2階木造

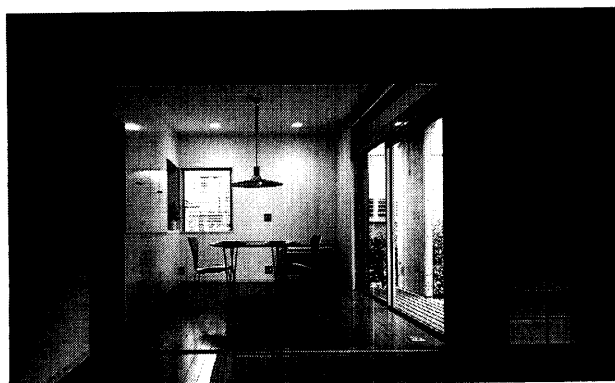


写真-2.1-1 廊下・和室・食堂・内に引き込んだ縁側

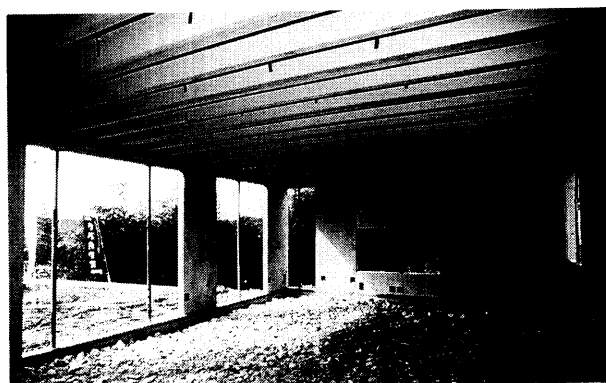


写真-2.1-3 6P×10P・30畳のPCパネル造の空間

2.2 振れる棟

—羽沢の住まい

住まいとは、元気に忙しく有意義に過ごす場所なのだろうか？ 何もしたくない、いや何もすることがないというように、体調が悪かったりただボンヤリとだらだらしていることができることが最も大切なものかもしれない。日だまりやちょっとした物陰でホッと心を許したり、台所から聞えてくるまな板の上できざむ軽快な音に包まれて、まどろんでいる光景は安らかである。だらしなさは違うおおらかさ、包容力のある空間をイメージする。

ここでは、プライベートスペース・水回り・ホール・パブリックスペースと順に北から南へ配列し、棟を斜めに振って木架構をかけ、次第に小屋のボリュームを増していく。梁から上は開放し視覚的につないで小屋組のしゅみを明らかにしており、登り梁がみえない側は順勾配、もう一方は梁をみせてねじれを調整する。棟に沿わせたACダクトとその下の水平架構、トラスはどれも振れる方向を強調するものであるが、重く強く見えぬよう白いスティンをかけ、木の素材感を和らげた。ルーズにつながる空間は、改まる・ジャストフィットといった窮屈さより、くつろげるラフなスタイルを表現している。

書斎や子供の部屋がある別棟は南北に増築できるように計画しており、ライフサイクルやライフスタイルの変化に対応する布石と考えている。

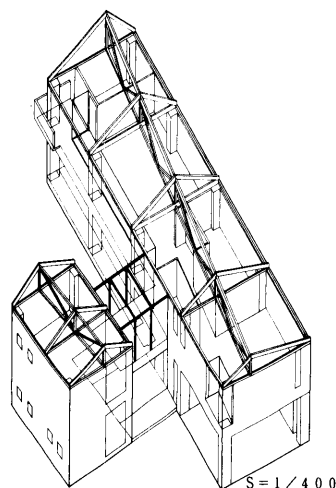


図-2.2 振れる棟の架構
がつなぐ空間

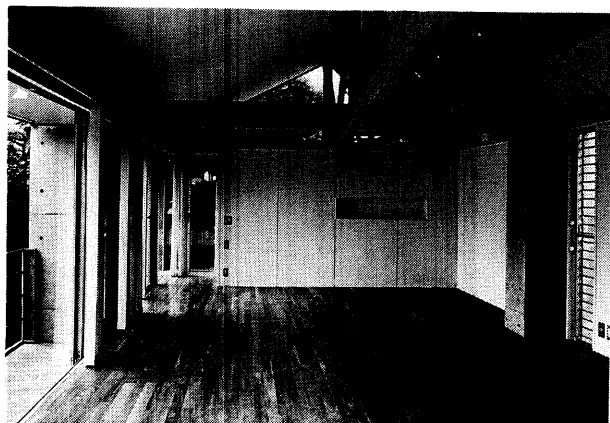


写真-2.2 居間・食堂・厨房をつなぐ架構

2.3 空との交信

—蒲田の住まい

容赦なく迫る周辺環境や、様々な要求を盛り込んだプランという、いつもながらに現実的な問題を抱えながら、計画を進める。壁で囲まれたフロアは物や人の軌跡でうまっていく。そこは、生活の場としての機能が凝縮され日常が繰り返し展開する。そんな中にも埋めつくされることのない隙間、無造作でおおらかに広がる空間をどのように計画するか。日常的な風景を特別な景色に変え、よどみ、偏りがちな興味や嗜好を刺激し、不安定な中に緊張感をもたらす。住まいは、人や暮らしを優しく包んでくれるものであると同時に、絶えず成長し、変化することへの準備を求められる。

ここでは、壁と屋根の間（フロアからほんの2mほど上部にあるに過ぎないが）を現実と非現実の間を繋ぎ、離す空間となると考えた。その隙間から見上げる空は限りなく遠くへと広がる。光や風を呼び込み、時々刻々と変化する光景は、いつも空と交信しているかのようなのである。周囲の建物や人の視線といった都市環境の無言の圧力から開放されて、せめて豊かな気持を手に入れたい。この欄間が夜の訪れを告げ、空模様を描きだす様は、有元利夫の“夜のカーテン”“雲のカーテン”という題名の絵を思い出させてくれる。

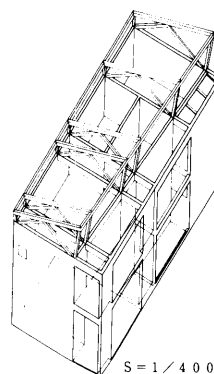


図-2.3 壁と縁を切り、浮かした屋根架構



写真-2.3 欄間ごしに空と交信

2.4 多様性

—桑原邸

スペースが限られている中で、季節や時間によって装いを変え、孫や子供たちを迎えて大勢が時には集い、そして家事・接客・食事・団らんと沢山の用途に使い分ける。そんな暮らしがたは格別変わったものではなく、ちょっと前（それでも50年くらい前になるだろうか）にはよくある光景ではなかったか。床座の暮らしは機能別に分けた多くの家具を必要とせず、茶ぶ台や座ぶとんなど手で動かせる道具で様々な使い分けをしていたし、障子やふすまを開閉することで縁側や続きの部屋とつなげて広さも変えていた。音が聞えてプライバシーがない。寝ている傍らでお膳を広げなければならないといった事情はさておいて、重複しないような機能をまとめたり、つなげる空間とその役割を想定しておくことで、有効に、また、多様に暮らしを展開できると考える。

ここでは道路際に沿うように玄関、前室と続き、茶の間を囲う。茶の間には大きめの掘りごたつと壁のへこみにTVが置かれているのみで、障子を開け放すと前室の収納がサイドボードとなり、床の間のように壺や絵を飾るスペースとなる。テラスへも折り戸のガラス戸と引き込み障子で、視覚的にあるいは空間として伸縮させることができる。発想を転換し、限定した道具を使って住宅を自由に気軽に使いこなすことができれば、また新たな視点が見えてくる。

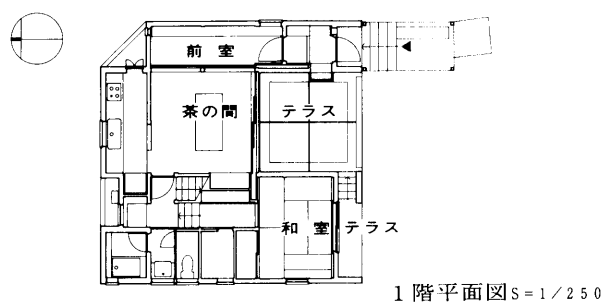


図-2.4 茶の間を中心に展開する



写真-2.4 茶の間の建具を開け放す

2.5 あいまいな空間

—東が丘の住まい

住まいとは、機能を整理して能率よく合理的に配分していくというよりは、日の当たる縁側で虫干ししながら犬とたわむれ、子供が泣き叫んだりぐずったりしている傍らで^{しば}あやしながら新聞などを読むなど、幾つかの行為やそれに伴う状況が重なり合うことが日常の暮らしであり、住まいの光景である。家事が断片的にはあってもとりとめもなく続き、それでいてあまり深刻にならないでいられるのは、そんな家庭の、住まいの^{あいまい}のもつ曖昧さによるのだろう。作る、たべる、身づくろいする、眠る、整理する、などといった機能を満たす場を作り分けていく一方でそれらをどのようにつないでいくかがテーマとなる。階段や廊下など移動の空間はそうしたスペースの分化によって生れるもので、人や物を運ぶと同時に光や風も運び、分断しがちな空間を音を緩衝させながら視覚的につないで再編するものでもある。移動しながら、モノや仕事を片づけ外の景色をふと目にして気持ちを切り替える。雲行きによっては洗濯物をとりに行き、日だまりの中でうずくまる。

ここでは、厨房と食堂の間にホールをはさみ、簡単な食事ができるテーブルをはり出す。家族の行動を掌握しながら家事をし、家族も通りすがりにちょっと立ち寄って会話をする。流れるばかりでなく、少しスピードを落してよどむような空間がそこにある。

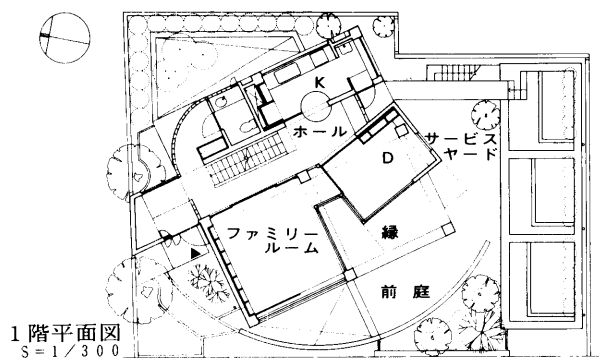


図-2.5 人の流れを止め淀をつくるホール

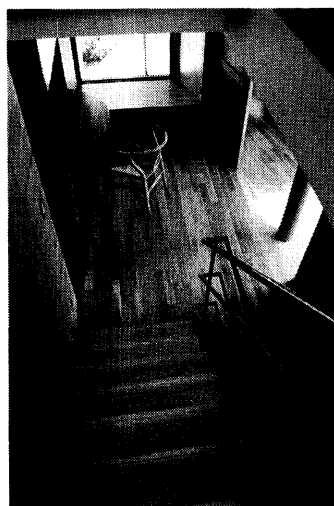


写真-2.5 厨房と食堂の間のホールにはみ出すテーブル

2.6 空間をイメージする一言 ー東が丘の住まい

“朝食は朝日の当る所で”という言葉から設計が始まることもある。1日を太陽に祝福されて始めたいという願望はとてもわかりやすい。鈴木博之の「夢のすむ家」の中で“都市は西に向って延びてゆくものだ”という説を読んだことがある。“人は植物と同じように太陽に向って生きたいという本能から朝は朝日に向って仕事に出掛け、夜は夕日の沈む方向に帰宅したい”のだそうだ。このことは先に述べたことと共通して面白い。太陽のエネルギーを受けて、家族が忙しい^{ひととき}時顔を合わせ、言葉を交わす。和やかな情景が目に見えてくるし、一日一日、季節や天候による違いを感じる中での食事の支度は、毎日を新鮮にし、そして身支度への情報を与えてくれる。食堂の位置が方位と敷地環境により凡そ決まると、それに関連して厨房や出入口、動線などを組み立ててゆき、案外このことが全体の構成を左右するポイントとなる。

ここでは家事をする主婦の位置（厨房になるのだが）を家の中心に置きたいということから始まった。接客空間と家族のスペース、プライベートな個室という3つのゾーンを地下、地上階、2階と重ね、厨房をその中心の地上階に置く。食堂はここでも朝日を受ける位置となる（もっとも住宅の場合、西日を避けて東南に開くことになるので庭との続きでこのような配置になることが多いのだが）。

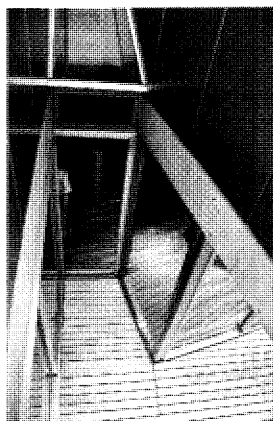


写真-2.6-1 食堂を南に向けて回転する

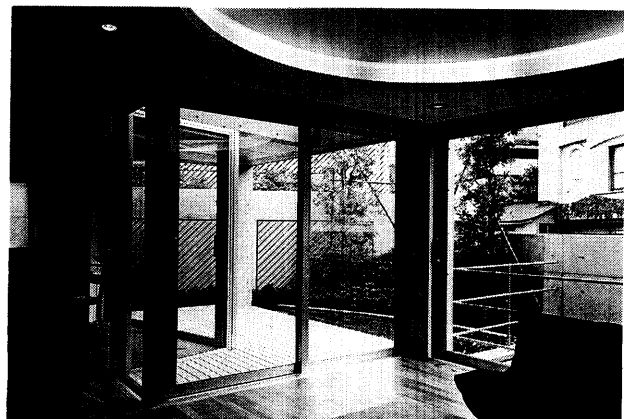


写真-2.6-2 食堂と家族室の間に深く貫入するテラス

2.7 家族と私 ー赤松公園の住まい

住まいが家族のアイデンティティを意識し、多様な個としての生き方を映し、独自の時をつくる場として捕えられ始めているとの思いがある。仕事場や生産性のある空間を併用するという機能的な面より、個としての意志や表現を模索する場が暮らしの中に作られ始めている。

ここでは、停年を期に老後へ備えて娘夫婦と1つ屋根の下に住むことを考えて計画は始まった。といっても厨房も玄関も別の隣居である。父と娘とお婿さんは英仏独の文学者という立場上独立した書齋を求め、可能な限りの空間を得るためテリトリーの配分を模索する。その結果1、2階を親のゾーン、地下と3階を子のゾーンとし4つの個室を4層重ね、それぞれの個室へ直接アクセスできるように出入口を設けて繋りを持つ。

近年岐阜県萩原町の“益田造り”に触れる機会があった。暗くプライバシーがない、起居様式が合わないとの理由から次第に減少しているようだが、よくみると現在都市住居が抱える問題解決のヒントがあって面白い。例えば狭さを補うために座式スタイルが見直され、空間の性質を特定せずに合わせられるよう引戸で仕切り、家族が孤立しないようルーズに繋げる。厳格なヒエラルキーを元に空間が配列されている一方、各室から庭や土間などを通じて直接外部とアクセスし、情報を仕入れ、コミュニケーションしている、と勝手に解釈し想像する。

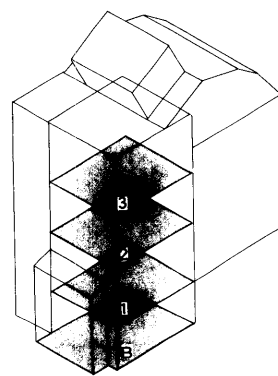


図-2.7-1 4つの室を4層に重ねる

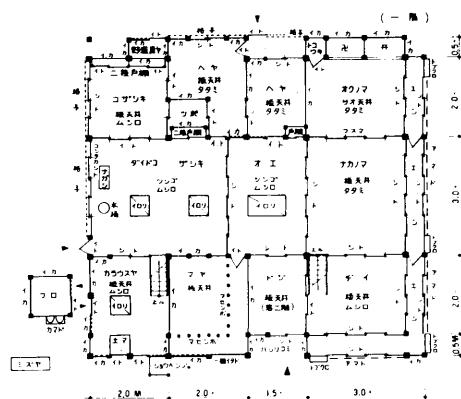


図-2.7-2 益田の村方の平面図、青木正次家

2.8 ワークショップ —押木田の診療所+住まい

診療所のある住宅に両親と同居する主婦のスケジュールを聞いたところ、朝5時に起床して、夜11時まで予定が一杯であった。朝は家族の起床時間に合わせ、昼は診療の合間に御主人と、夕食は両親も一緒に子供たちと先にすませ、診療の終る時間に合わせて再び食事の支度をする。家事に加え診療所の事務や雑事もこなしているので、職住近接ゆえに両立でき、それゆえに過密さを増すそんな暮らしの中で家事をしながら家族を見守り、子供たちがテレビを見たり、勉強する傍らで事務をとる。また夜遅く御主人が整理をしている時が唯一夫婦の語らいの時間にもなる。明確に時間や空間を分けておこなうというより、未分化のまま平行して幾つもの行為が繰り返される。それが家庭の情景であるようだ。

計画をしていて、御主人がカルテを整理し奥さんが帳簿をつけるといったワークショップが、家族室に近いものであるということを理解するのに少々時間がかかった。食堂は若い世代のテリトリーであっても、同居している両親と夕食を共にする共有の空間であり、茶室は接客の場、遊びの空間である。Rの壁でふっくらと包み、やや光を抑えた空間の中に、ワークショップと続けて子供室を提案すると大変喜ばれたのは、そんな家族関係にもより、親子の距離が自然にうまくとれるような計画と感じたのであろう。

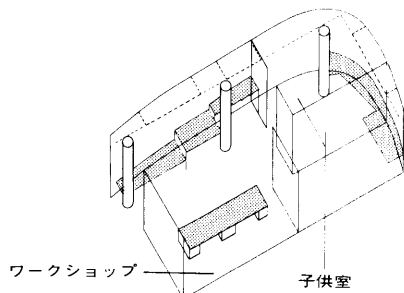
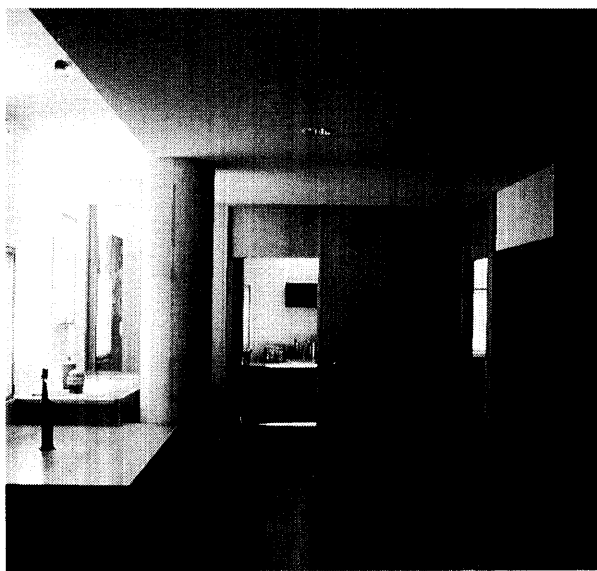


図-2.8, 写真-2.8 Rの壁の内側に包んだワークショップと子供室

2.9 隠れ家としてのアトリエ —鎌倉山のアトリエ

イラストレーターの施主が小説に興味を持ち、東京の自宅やアトリエから離れ、閑かに執筆活動に打ち込みたいとこの地を求めた。

住まいに併設した仕事場の良い点は、仕事と日常の暮らしがスムーズに繋がり、人生観や生活のリズムを相互に調整しながら創作していくことができることである。だが一方で、仕事場としては生活感を排除し、気持ちを切り替えて緊張感のある場を作ることも必要である。特に外から訪れた人にとって、暮らしの臭いや気配は、仕事のイメージにギャップを与え違和感となることもある。見えなくても聞こえなくても空気で伝わってしまうものである。

そこでこの計画では真ん中のブロックに玄関と水廻りを配置し、左右にアトリエと住まいのゾーンを振り分けて距離をとる。アトリエのゾーンはアプローチの方へ突き出し、更に直接外に通じる屋外階段を用意する。この階段は外部から直接アクセスできるという機能よりも、都市へ、社会へ、仕事場としての意志を示すための象徴的な記号としてより有用である。住まいをタイトに機能的に納めているのと対比的に、アトリエ内部の空間は、2層に吹き抜け、地下の書庫にも繋いで、遊びのある**ぼう**洋とした空間とする。

図-2.9 アトリエと屋外階段が桜並木へせり出している

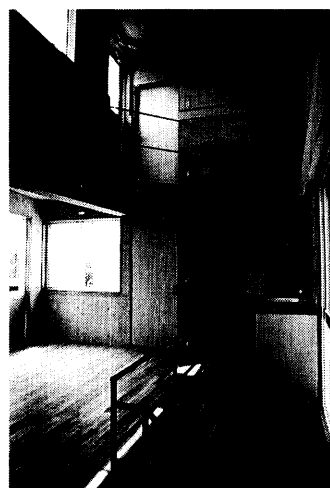
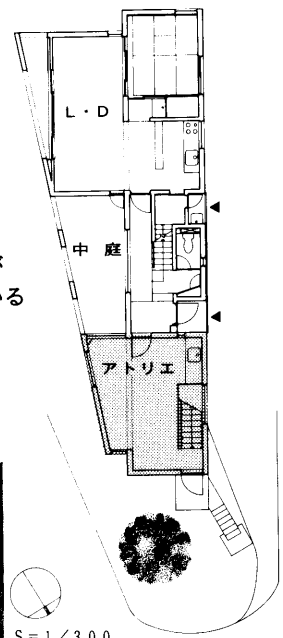


写真-2.9 茫洋と広がるアトリエ内観

2.10.A 84才にして建て替える —羽沢の住まい

高齢化に備え起居様式を含めて住まいを見直すことになった。住棟配置は旧家屋を継承し、日の入り具合や風の抜け方、庭の眺めなど、身体で感じ記憶している環境を変えないようにする。厨房から表通りの様子が窺えるような配置は、近隣から家の中に1人孤立してしまわないように、というおばあさんの希望であった。

夫婦2人が四六時中同じ空間にいるのはしんどい。互いに束縛されずに人を招いたり、自由に過せるようにしたいということから、おじいさんの書斎を別棟へ設ける。靴を履き替え雨には濡れずに離れへ出掛けるのは、気持ちを切り替えるのに程好い距離である。

次に、茶の間を通らない裏の動線が重要であると考えたのは、具合が悪くなった時に1人寝室から来客に気付かれずに行動できるようにという配慮からである。普段は引き込み式の襖を開いて広々と使い、季節や気分に合わせてしつらえる。引戸を多用しているのは、こうした使い方に対応できるばかりでなく、開いている時におさまりよく美しいからで、縁側から庭への流れをさりげなく作ってしてくれる。空間を細かく仕切らない、床のレベル差を無くす、足元を明るくするといったことは、歩行が困難にならないための予防であり、又困難になった時に人手に頼らず自分で行動できるよう計画しておきたいと考えたからである。

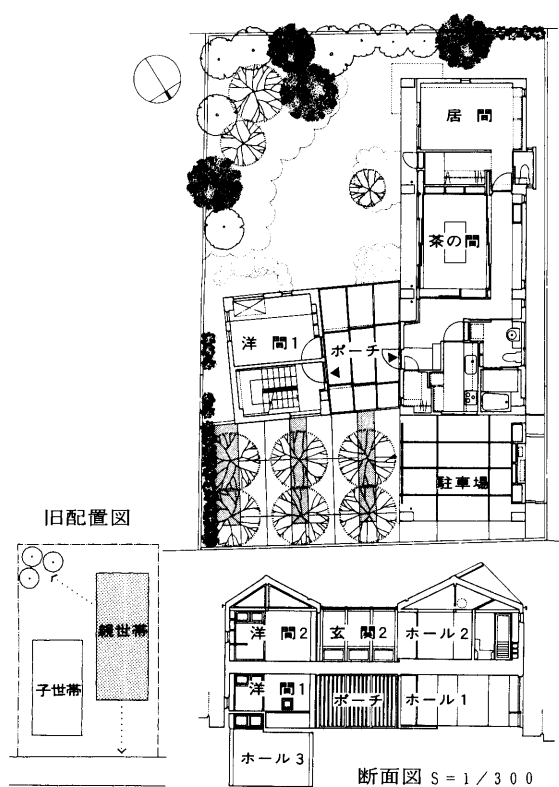


図-2.10.A 親の位置は変えず、子世帯の住居を2階に

2.10.B 終の住処 —小金井の住まい

長年住み慣れた土地を分け、母と息子家族の住まいを同時に計画することになった。独り住まいの母の暮らしの場と、母屋の厨房・食堂をサービスヤードを挟んで繋げ、双方から人の気配や賑いを感じ、行き来しやすい配置をとる。大谷石を敷き、小さな植え込みには食材や薬味となる樹を植える。洗濯物を干したり、庭の手入の道具を広げたり、縁側のどかな光景が広がるであろう。

母の暮らしの場は、3.3m×9.6m 約10坪に小さく納めることにより、声楽家の主人とピアノ奏者の娘夫婦の稽古場をできるだけ大きく計画する。それぞれのスペースを2つに分けた小屋組に納めることで遮音し、独立させて異なった雰囲気をつくる。

物を整理し気持ちを切り替えることによって得られたこの空間は方丈記を思い出させる。物への執着を絶つことによって身も心も軽くし、その代りに細やかな環境の変化を受け止めていつも新鮮なまなざしを失わないでいられる。それまでに生きてきた道のりで得たものを大切にしながら尚、未来をどう生きるか。狭まりがちな行動範囲を、コンサートホールに訪れる人々が新風を吹き込み補ってくれる、そんな仕掛けが気持ちを豊かにしてくれるであろう。(この9月、最後の一時をこの空間で過ごせることを喜びながら療養生活を送り、施主は亡くなった。そして、ホールに賛美歌が流れる中でお通夜は行われた。)

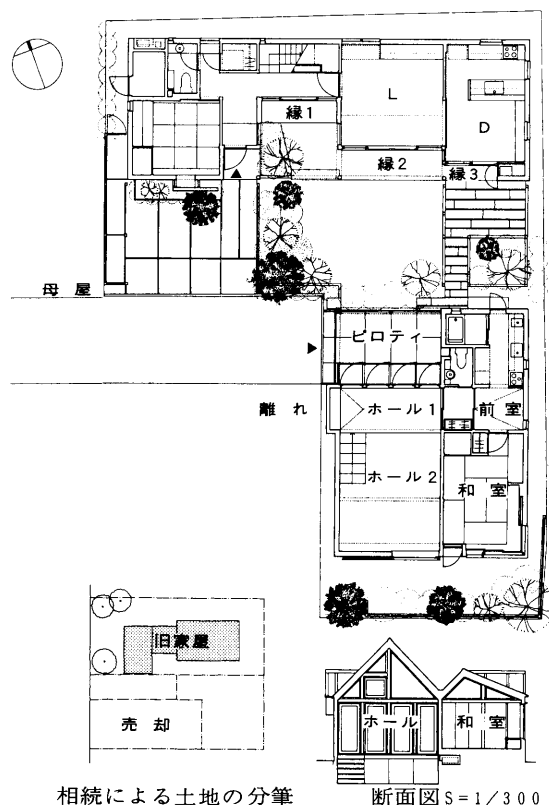


図-2.10.B 母の暮らしの場と音楽ホールとの空間の違い

2.11 インテリア・イコール建築・イコール街並

室内の空間をつくるために建築を計画することは同時に周辺の余白を計画することでもあり、内と外は一对のポジとネガの関係でとらえたい。都市的な環境形成というマクロからの視点によって決められた容積や建ぺい率そして斜線制限などの形態規制に対して、どのような独自性のある提案をすることができるか。高層高密度化していく都市において唯一変わることなくオープンスペースとして残される道路の空間と、どのように関わることで住空間を豊かにすることができるのか、そうして建築やその余白のデザインは道空間のインテリアとなって街並をつくれるか。20坪前後の小さな敷地でも1つ1つの建築が道空間との関係において自立し、魅力的な解決策を興じていくために4つの要素を提示してみる。

- 屋根：居室を軽く包んで空へと結ぶ。スペースを限定され周囲をタイトに抑えられた時、中の力は残された自由な形を求めて夢を含んで空へふくらんでいく。
- 壁：道から厚くガードする、あるいは光や風を取り入れながら視線はカットするなどしつらえ方は様々にある。
- 緩衝空間：動線や水廻り、テラスや縁側などサブリマのゾーンを間にはさんでゆっくりとつなぐ。
- オープンスペース：樹陰が潤いをつくり視線を和らげる。ピロティはアイレベルを街並へ開放し、床のレベル差が内部のプライバシーをつくる。

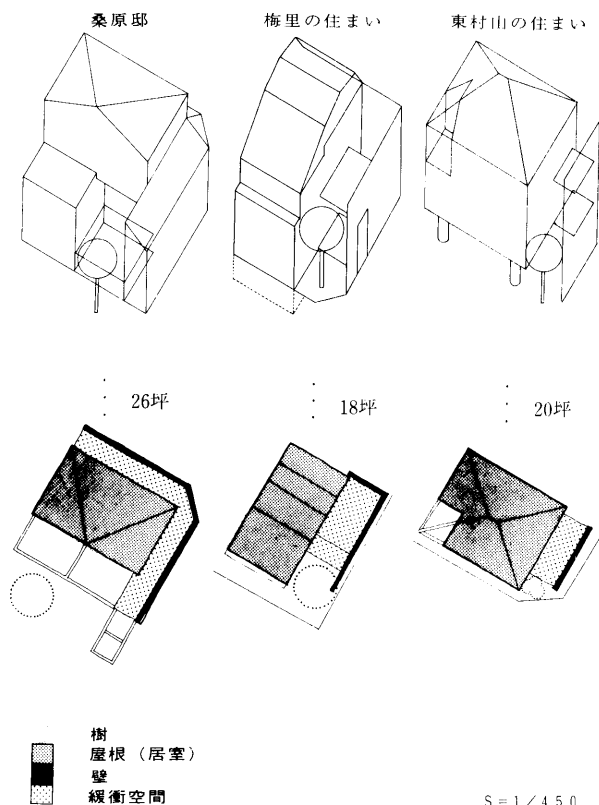


図-2.11 インテリアと街をつなぐ建築の四要素

2.12 はらむ空間

—東村山の住まい

1階を4本のコンクリートの丸柱で支えるピロティにして開放する。この2台の車を停めるためのスペースはもはや居間や寝室と同じように必要不可欠な生活のスペースである。光と風と視線をとおすよう、空間は囲わず、車を移動させれば屋外の作業のための土間空間となる。なるべく使い方が制約されないような構造と表現を選ぶ。

このピロティが街並から生活のスペースを持ち上げて切り放す。プライベートゾーンを2階に凝縮し、パブリックゾーンは3階にのびのびとつくる。軒高が抑えられても斜線制限にそった勾配で架けた屋根は、2本の大黒柱で支えられ上方へ一杯にはらむ。空間とはスペースとボリュームによって表現されるものである。東南の一角をテラスにあてて欠き込み、ここへ光や眺めを集束させることによって、全体には落ち着いた空間をつくる。収納壁の裏側には厨房が隠されていて、家族皆が気軽に立ち働き、手伝えるように計画した。

これらをまとめて殻に閉じ込めて、上下を繋ぐ動線ゾーンと分ける。動線ゾーンはトップライトや大きな開口で透けるようにつくり、緩衝空間ゆえに身構えることなくのびやかな表現とする。

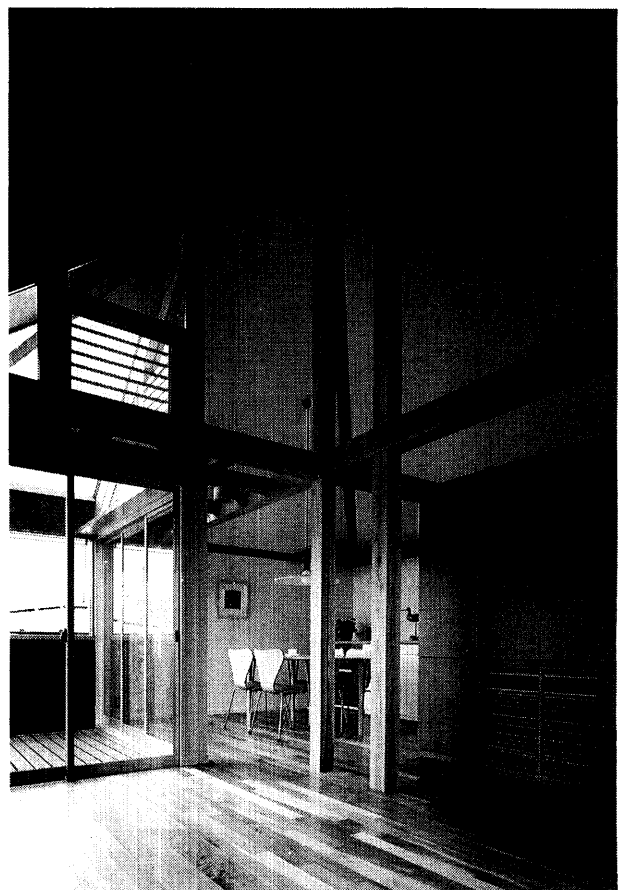


写真-2.12 3階をいっぱいにはらむ空間

2.13.A 都市のランドスケープ

—桑原邸

敷地は新宿副都心の超高層群の膝元にあり、曲がりくねった道沿いに中小マンションや商業ビル、戸建住宅が混在している。景観としてみると圧倒的なボリュームでビル群がせまり押寄せてくる感じがする。このような環境にありながら、なお庭付の木造住宅にこだわる事ができたのは、バブルの少し前に計画したのが幸いした。

老夫婦は昔からの近隣関係や今も残る地元の商店街の中で暮らしを育み、盆栽や庭の手入を楽しみつつ、アクティビティに富んだ都市景観のもとで、交通の便を生かしてフットワークも軽く行動している。バブル時代のビルラッシュに誘われて気が遠くなるほどの借金を元に必要以上の収入を得るよりも、自分たちの日常の暮らしにとって大切なことを再認識して残していくことである。また、都心部を高層化していく都市計画上の方針はわからないではないが、どこも均質に作っていく必要はない。住み慣れた街を住みやすい街にしていくのは、住んでいる人々の魅力とゆっくりとした時間である。

南東に張り出した地形を利用してアプローチをとり、玄関・前室と動線を伸ばして居室へ至る経路は、近さを補い気持ちを切り替える。続いて水回りを巡らせ、主空間を取り囲むように2つの道路側に配置する。この緩衝空間は周辺からの視線をさけて採光し、風を抜く。そしてトップライトから漏れる明りが角地としての表情をつくる。

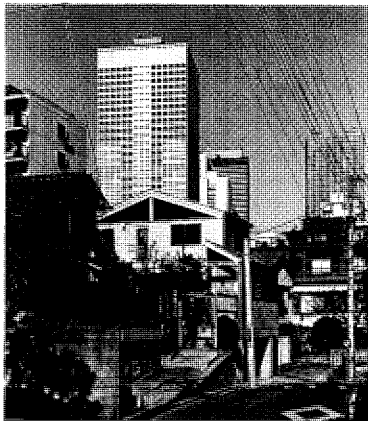


写真-2.13.A-1 高層ビルが聳える背景

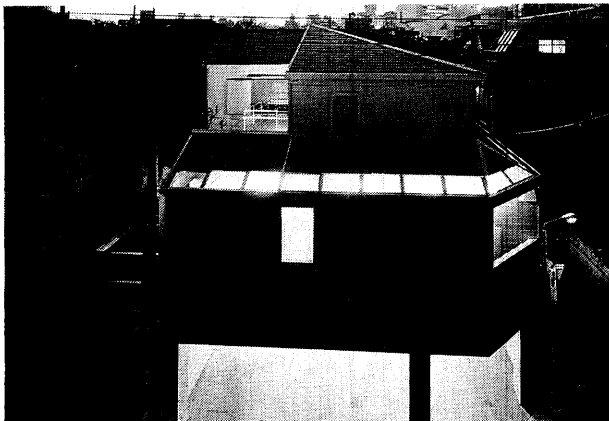


写真-2.13.A-2 トップライトの灯が角地の表情をつくる

2.13.B 都市に眠る小さな宇宙<坪庭> 一梅里の住まい

敷地は幹線道路から50m程入った古くからの住宅街の一隅にある。巾4m未満の狭あい道路と巾2mほどの人道とに面し、境界を後退したり、元のままの塀が残ったり、でこぼこしている上に曲がりくねってなんとも猥雑な印象を与える。しかしその分、通り抜けの車は少なく最寄りの駅への道筋として人通りは賑やかである。18坪の敷地の中で北側隣地と東側道路に対しては、境界ギリギリまで建物を寄せて厚いコンクリートのL字の壁で囲いガードする。壁の内側には緩衝空間として動線のための空間を配置する。大通りから歩いてくるとコーナーにあけたスリット越しに内部を垣間見、そして東に回って厚い壁に穿かれた穴をくぐり、一転して光を抑え落ち着いた閑かなポーチへと踏み入る。界隈性を拒絶し一瞬にして気持ちを切り替えるために壁は硬く、重たく、また無機質なコンクリートを選び、ポーチは軒下に落す影と目深におろした格子で視界を遮り静かなイメージをつくる。少し目が慣れるころ、足元の植込みが明るく目に入り、穏やかな坪庭の光景にほっと心が緩む。立て込んだ家並みの間で、この坪庭は、往来の人と家人を結ぶのに充分なオープンスペースである。

階段ホールからスリット越しに通りを眺める視点は、元の住まいから引き継いでいるもので、猥雑な道筋ゆえに意外な景観を見せてくれる。



写真-2.13.B 大きな壁に穿たれた入口の穴

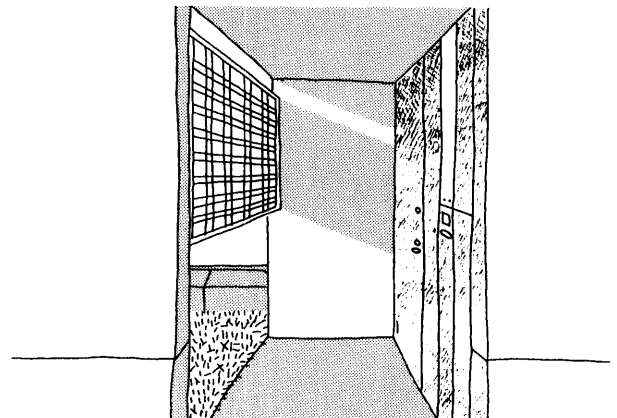


図-2.13.B 静謐なポーチ

2.14 一本の樹をめぐる

—梅里の住まい

一本の樹と坪庭をめぐる、内部からの視線が交差することなく様々に楽しめるよう計画した。

- 表通りから RC の壁をくぐりポーチに踏み込むと目深に降ろした格子の下より日を受けた植込みが目映る。
- 玄関ホールから振り返ると正面の格子越しにぼんやりと樹形を眺め、格子の下から再び見える緑。
- 茶の間に回るとポーチの格子と RC の壁を背景に、灯籠と共に全容を認め、また通りへと続く視線。
- 茶の間の床は GL+800 と少し高く、座っていて通りの人から見下される心配はない。ポーチに訪れた人との視線を避けるため格子の高さや厚みを計画する。
- 地下ホールより天窗の光越しに梢を眺め樹影を楽しむ。
- 階段を登ると正面のテラス越しに空と共に広がりのある梢を見る。
- 洋間からは触るほど身近に感じる樹。

この東南の角に仕組んだ坪庭は、見えてはいても堀割や用水のように近付くことを許さない低くて分厚い混壇と、日除けや目隠しとなり四季を楽しむための1本の落葉の高木とで構成した。目が合えば軽く会釈をし、見ず知らずでも“良く咲きましたね”などと一声掛け合うようなふれあいのある街、18坪の敷地という割には近隣の協力があって、スムーズに仕事が運んだのもこういう背景があったからであろう。

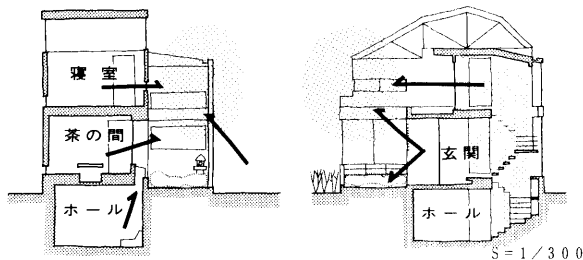


図-2.14 一本の樹をめぐる視点、内から外から

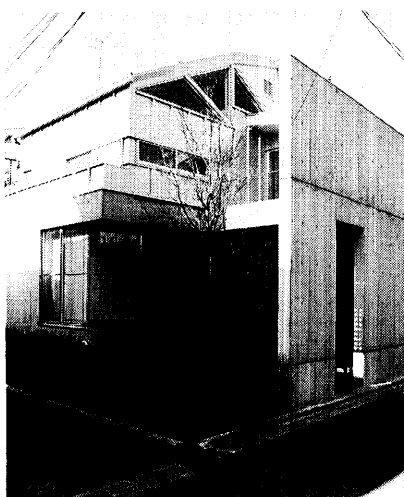


写真-2.14 南東の坪庭・高木と低く厚い混壇

2.15 循環する経路

—東が丘の住まい

○家からの眺め——周囲を隣家に囲まれてみると、それらとともに向き合うことを避け、視線をかわして、道や家々の間を渡る風や光を捕えたいと思う。都市や自然の環境を読み取り、手掛かりを求め、それとの関係において個を成り立たせると同時に、内からの要求により空間化する。

○回転——9m 立方のキューブを敷地の中で回転させて、光や風を巻き込むように引き入れる。建物周囲4面に4つの戸外空間（アプローチ、前庭、サービスアクセス、閑かな庭）を配置。隣地との間にそれぞれ距離を保つ、この“間”が内部空間を豊かにするための戸外空間として働くことを前提にする。

○循環する経路——アプローチから玄関を通してホールへ、そして厨房からサービスヤードへと抜ける。そのまま犬小屋の脇から勝手口へ至り車庫から通りへ、もう一方は屋外階段で車庫の上の屋上庭園へと登り、Uターンして物干し場を兼ねたブリッジを渡ると2階ホールへ至る。右に洗濯などの水回り、左に建物の芯となる吹抜けを見下ろし、突き当たりから玄関を覗いて階下へ、そして地下へと降りていく。人の動きは光や風を伴って建物の中へと導く。敷地を縦横無尽に駆け巡り回遊する動線は意外な視点を発見し、都市の隙間や余白に気付かせてもくれる。

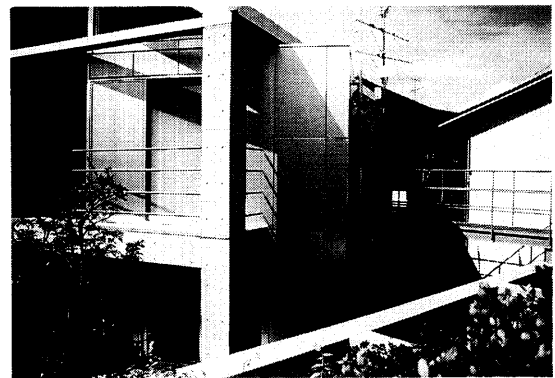


写真-2.15 ブリッジで屋上テラスをつなぐ

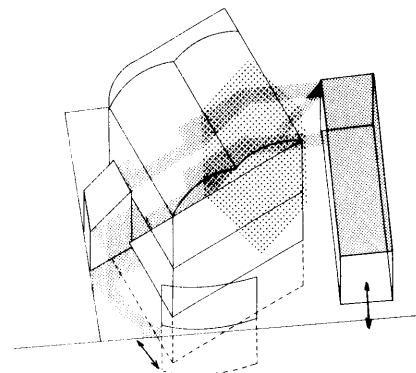


図-2.15 循環する動線

2.16.A 層を重ねる1—NH-63ウベハウス宇部の住まい

自然や時の流れを映し出し、いつしか内から外へ溶け出す暮らし。薄く、軽く、透けて重なるエレメント。北から南へ、納戸や下屋（内玄関への土間・物干し場）、Aゾーン（内玄関・水回り・納戸）、広い廊下（ユーティリティ・押し入れ）、Bゾーン（仏間・厨房と茶の間・寝室）、広縁やぬれ縁と、6層の“ケ”から“ハレ”の秩序を作りながら重ねる。同時に西から東へ、パブリックからプライベートへ移行しながら配列する。

AゾーンはPCパネル造、BゾーンはPCパネルの臥梁^がを鉄骨造でつなぎ廊下と共に木造の小屋を架ける。PCパネルのブロック6つを独立させて、その間に内庭や坪庭を挿入し、光や風を引込んで南北に視線を透し、内と外とを緩衝させながら交差し融合する。整然とした配列に投じた茶の間のわずかな振れは、さらに変化のある様相を醸し出す。分節した空間を渡るとき、それぞれが貫入し合う結びの場はPCブロックの打ち放しの外周面が向き合って内壁となり、外部空間に包まれたかのように感じる。下屋やぬれ縁は木造で作り、軽やかに多様な表情を外観に加える。内と外を一線を引いて分けるのではなく、温度や湿度のゆるやかな変化が空気を変え、土間やスノコ貼りなどテクスチュアの違いによってできるラフな雰囲気^はが暮らしを触発していくもの考える。

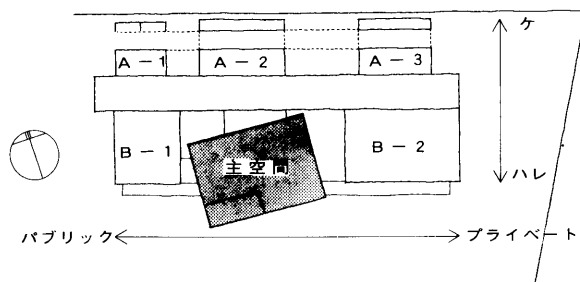


図-2.16.A-1 6つの層と振れるブロック

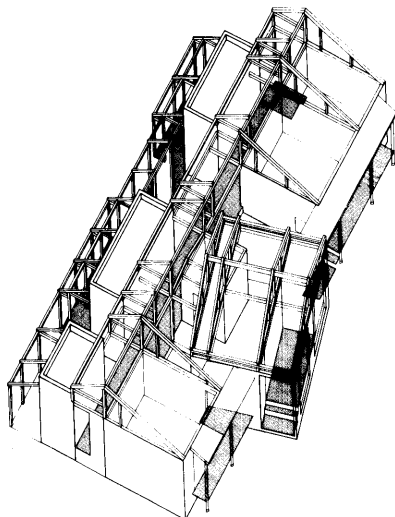


図-2.16.A-2 構造のしくみを表わすアクソメ

2.16.B 層を重ねる2 —小倉台の住まい

3つの波型の金属屋根——食堂、居間、客間、予備室といったパブリックゾーンを、3つの波状の屋根でダイナミックにつなぎ障子で軽く仕切る。

厚い左官の壁——閉ざされがちなプライベート、サブゾーンは動線とからめて小窓やスリット状の開口でつなぎ、熱気や涼風の通り道としてルートをつくる。

板貼りの壁柱——無防備なほど解放した主空間をガードし調製するのは、ぬれ縁を挟んだ壁柱であり、少し引き込んだ戸外の空間である。建物際に塀の役割を引き寄せることにより庭を街へ解放し植栽のバックとして寡黙な背景をつくる。

建具を移動させることによってその場をしつらえ、断熱と通気を仕組んだ壁で囲い、天候や季節、時間の変化に対処して環境をつくる。人が体温を調節するために衣服をはおるように、住まいもエレメントを薄く重ね、日の光を入れ、風を封じ、思いのまま使いこなすことができれば、実際の温度の変化のみならず、しつらうことにより得られる雰囲気やイメージが涼感やぬくもりを伝える。住み手の感性や能力が生かされるようエレメントを仕掛けておきたいと考える。

3つの層をシンメトリーに配置するが、躍動感のある波型の屋根がこの均衡を破り、安定した中にアクティビティを引き起す。

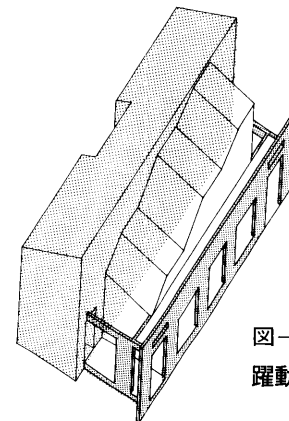


図-2.16.B 3つの層と躍動的な波型屋根

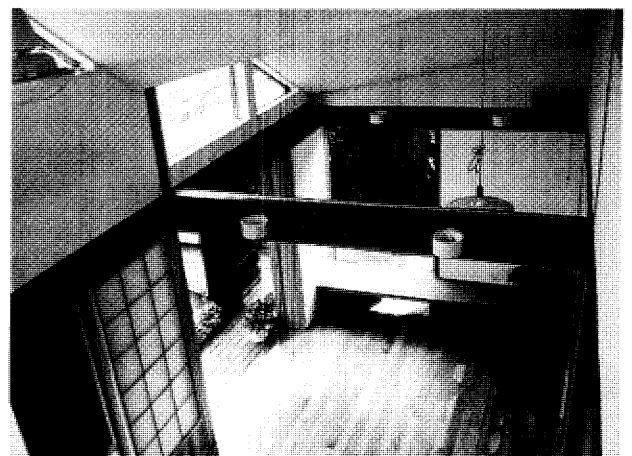


写真-2.16.B パブリックゾーンより縁側、バックヤードを望む

2.17 しまう 再び巡る

ー押木田の住まい

省エネルギーのための方策や産業廃棄物による公害を抑えてリサイクルを図るなど、限りある資源を大切に使い、自然との共存を考えて暮らしていく知恵が求められてきている。パッシブソーラーや高気密高断熱が広まる一方で、作られた環境に満足するばかりでなく、環境の変化を楽しむ視点と楽しめるようなコンディションを自ら備えておきたいと思う。便利なモノに慣らされそれらに埋もれて暮らすより、身軽にありたい。そんなことから機械化を抑えて、わずかな温度差によって起こる空気の対流や太陽のエネルギー、風などを利用しながら四季折々、住む人が僅かな道具立でしつらえを変えて対応する計画をしてきた。

そんな折、雨水利用を計画する機会を得た。都市部では清流を直接引き込むわけにはいけないので、水を生き物として扱うには手間がかかり、なかなか踏み切れないでいた。ここでは何かできる手立ては講じておきたいという気持ちと、非常時への備えに対する期待と少し余剰分を楽しもうという遊び心から出発した。採算や効率優先よりも、貯水槽などの設備機器を日常目に意識することのないよう計画する。その結果、地中梁の二重ピットに水を溜め、ポンプアップしてトイレと水路に利用する^{つくばい}躊躇からスロープに沿って7段の水路に水を落とし、潤いのあるアプローチをつくることができた。

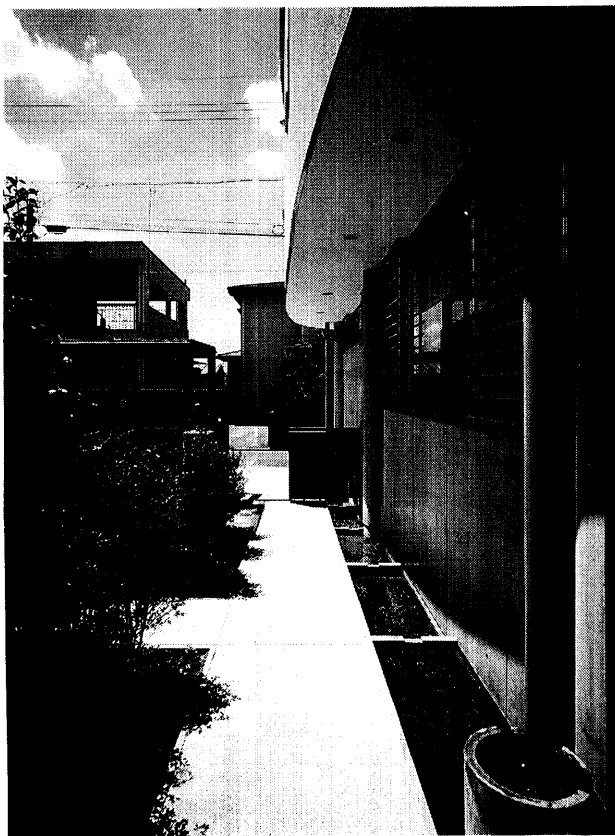


写真-2.17 緩やかなアプローチ沿いの水路、
樋より^{つくばい}躊躇に流れ落ちる

2.18 しまう

ー羽沢の住まい・東が丘の住まい

街並を乱している原因に車庫と空調の室外機、各種メーターやゴミなどがある。生活のための機材が増え、敷地にゆとりがなく接道する長さも限られるため、表と裏の仕分けがなされず、すべて唯一の開放空間である道へ溢れ出てくるわけである。そうしたところは塀で囲うわけにもいかず、建物と建物の間は狭まってあまり意味がないまま残る。これらの原因を収めて、何事もなかったように表の顔をつくり、わずかに残る余白は繋いで光や風が通り、いざという時に住民同志助け合うことができる裏の道としてのネットワークが組めればと思う。

代田の住まいでは車庫用のピロティを庭へ続けておいたところ、奥のアパートで火災が起きた際、消防士さんがホースを担いで慌てて駆け抜けていったそうだ。

羽沢の住まいの道に続く前庭は来客用の駐車場でありアプローチのためのオープンスペースである（周辺環境から考えて建設中の資材置場や駐車場を確保することも必要であった）。緑のボリュームを大きくとりたく6本の花みずきを植える。やがて成長して上空を梢が覆い木陰を作って、眺めるためでも車を止めるためだけでもない実用的な楽しみも加わった間として息づいてほしい。

東が丘の住まいの玄関アプローチには植え込みを作り開口部に合わせて照明とメーターを埋めこんだパネルをデザインする。

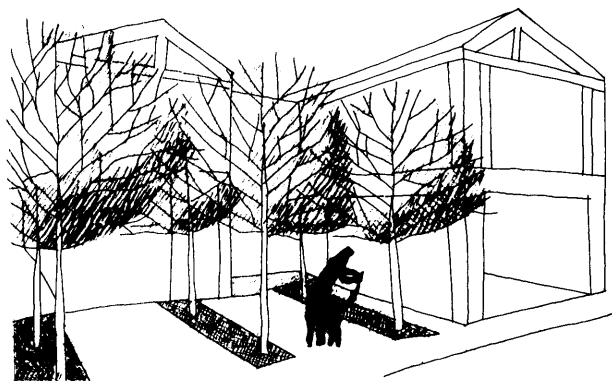


図-2.18 6本の花みずきが緑のスペースをつくる・羽沢

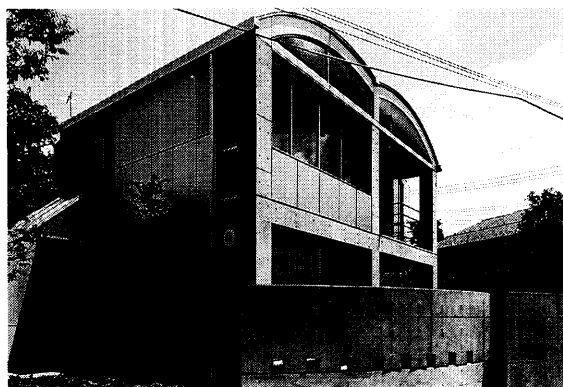


写真-2.18 ポーチに集まる表と裏・東が丘

2.19.A ランドスケープ

ー井上邸

敷地は南西に多摩川を望む斜面にある。用水路沿いの道から緩やかに登りはじめ、上の道路近くで40°の急傾斜となる。西側は多摩川を渡る第3京浜道路と接し橋脚とのジョイント部からさしむ音が響いてくる。

建物の位置は施工の難しさを超え、眺望を求めて崖地を選ぶ。アクセスも用水路沿いの猥雑な街並をさけて、上の道からとることにする。急傾斜地にあえて居を構えることにしたのは以上の理由ばかりではない。下部の平坦な土地を菜園として利用し、その他は庭園として楽しむというよりも雑木林のまま、宅地に必要な分だけ木を切り開き、建物をコンパクトにまとめて埋め、できるだけ景観を乱さずにおくためである。

上の道から建物が緑に埋る斜面を見てステップを下りブリッジを渡ると、コンクリートの飛梁で囲まれたテラスに降りる。正面の額縁として切り取られた開口に多摩川を、そして夜には第3京浜道路のインターチェンジのイルミネーションを望み、消えていく彼方を見据えて玄関へと至る。この固有のシーンを手に入れドラマティックに演出したアプローチを通過する間に、都市から己の空間へ、社会から私生活へと緩やかに心を切り替えていく。第三京浜道路の騒音を避けるべく防音仕様としたが、後に室内楽の演奏会を企画するようになった時、むしろ中から発せられる音を心配せず楽しめることに気がつく。

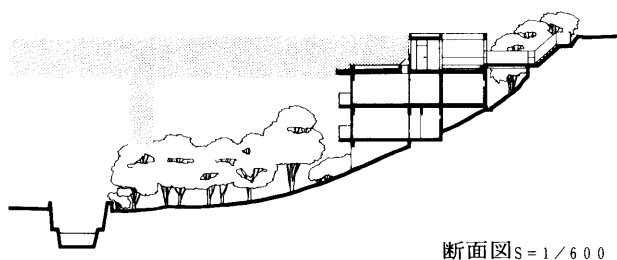


図-2.19.A 40度の斜面にさし込まれた箱

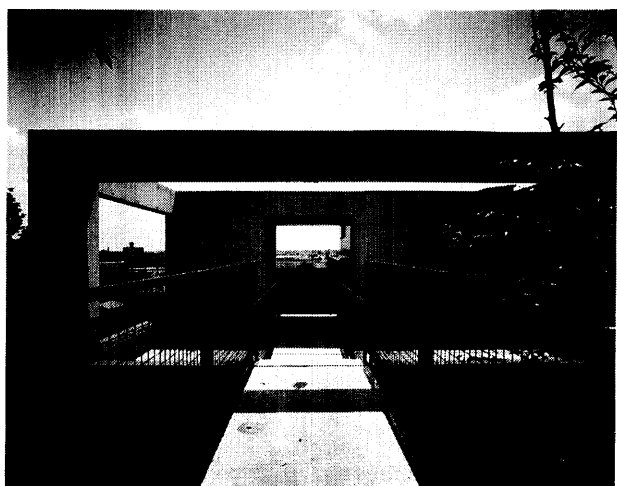


写真-2.19.A ブリッジの先に広がる眺望

2.19.B 桜並木がプロムナード ー鎌倉山のアトリエ

鎌倉山の奥深く尾根に沿った桜並木を抜けると、施主が“一握りの海”を求めて手にいれた敷地が日射しを浴びて現れる。道はそこでふた手に分かれ、そのY字路に挟まれた敷地は不整形の傾斜地で、後ろに手付かずの裏山を背負い前面は切り立った崖の下に新興住宅地を見据え、昔ながらの山あいに住宅が点在する所にある。

桜並木に対峙する建物と、自然の時の流れを映し出す1本の高木を植えたマウンドによって開放的に周辺に繋げるイメージは、桜のトンネルを抜けたときに決った。それは、おそらく施主が幼いときを過ぎた海辺の心象風景や、私の心に残る風景などと相通じるほど強いインパクトがある周辺環境と敷地と建物からなる風景である。

敷地に立って周辺を眺め、今来た道を振り返って見たときその考えを再確認した。桜並木を計画地へのプロムナードとして据え、急な法面ゆえに残された緑地を前庭として取り込み、遠方に望む一握りの海を借景とする。

きわめて厳しい敷地条件も少し遠くに視点を置けると壮大な構想が生まれる。一刻として同じ姿ではありえず、一方で規則正しく繰り返しもする自然の営みは、人と建築の間に生じる関係や日常の生活に似ている。自然を捕える手立てを樹としてあるいは水として考え、時々刻々と変化する様相を建築に映すこと。それは建築に無限の様相を与え可能性を引き起こす。

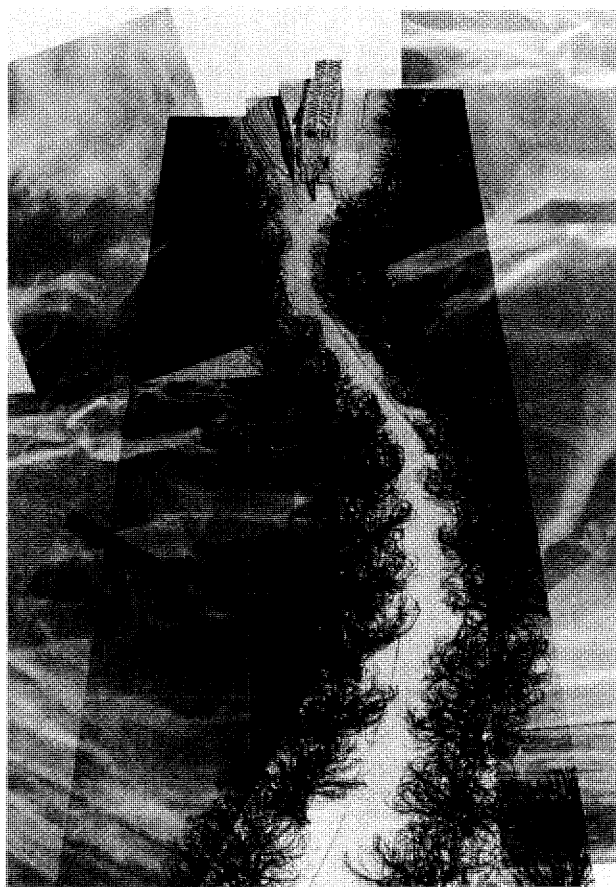


写真-2.19.B 桜並木が敷地へのプロムナード

2.20 フォルム

ー山本山荘・森本山荘

セカンドハウスでの過ごし方や求めるものは住む人によって違いがある。しかし都市環境と比べると、2つのプロジェクトは地域は異なるがどこまでも続く森の中の一角にあることで共通している。眺望が格別よいわけではなく、特に強い方向性を示すようなインパクトのある敷地環境でもない。方位の違いはあるがあまり意味を持たない。ただ圧倒されるばかりの広大な自然の中で人の存在は小さく、人が支配できるものに限界を感じさせられ、敷地を敷地境界線で仕切って所有するというより自然の一部をある時期借りて家を建て、やがて自然に帰るといった長いスパンが見みえてくる。

そんな中で建築は裏も表もなく自然と対峙するようせめて凜としたフォルムを作りたい。バランスのよいシンメトリーでしかも一筆書きで表現できるほど単純なフォルムは、自然の中で真近かにみる大地のでこぼこや樹形などの有機的なエレメントや、景観としてみた時の木々の規則的な繰り返し、そのどちらとも距離を置いて人工物であることを示す。強い風雨などの厳しい自然に対し、昆虫や鳥などが羽を畳んで小さくなるように、やり過ごすためのフォルムでもある。このような気候風土に備え、利用しない間を考えて閉じ方が次のテーマとなり、同時に自然を満喫するためにどのように開いていくか、これらは相反するが実は共通する要素の中にある。

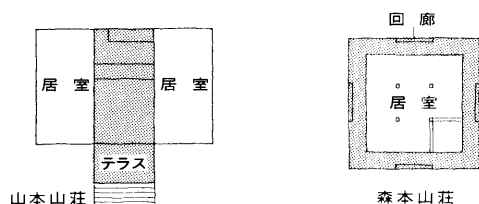


図-2.20-1 深く引込み抜ける・周囲に巡らす内と外

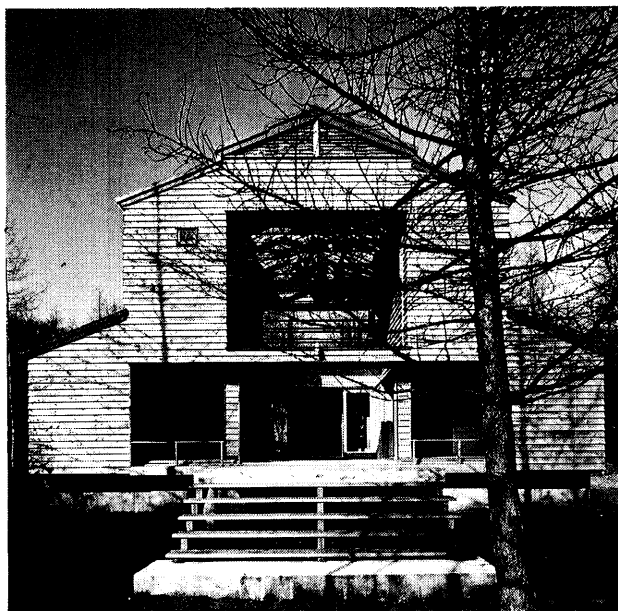


写真-2.20-1 南北へ建物をぬけるテラス（山本山荘）

山本山荘は両側の壁から雨戸をくり出し、上部はシャッターを降ろす。そうして階段と一部のテラスを残して建物を突き抜けるように内部に引き込んだ外部の空間を囲い閉じる。このテラスに向って両側の室から視線が集まり、上空や前後の林へとぬけて戸外と連続する。こうした作り方は、グランドレベルにあってどこからでもアクセスできるとき、外来者や外からの視線を掌握し、また、避けながら、安心して開放する方法である。そして用途が固定されないこの空間は、縁側やサンルームとなるほか、時には舞台稽古の場となり、大きなボリュームが、ブリッチやガラスの渡り廊下、そして各室とのつながりによって生かされる。

森本山荘は湖から立ち上る霧をよけ、人や車の通りを避けて少しでも日照や眺望を得ようと、1階の床を2.2mほど上げて高床とする。従って入口へは外の階段で登りアクセスするので、玄関ドアの戸締まりさえ確認すれば安心していられる構造である。地上4.8m、2階のパブリックスペースは周囲に回廊を巡らし床面まで開放して樹上に浮ぶように計画する。深い軒の出を利用して回廊の外側に戸障子を入れ、閉じると外気を柔らげる断熱層とする。

どちらも平面は方形をモチーフとして出発し、立面は安定感のある山形と、仮分数であるがRC造の基礎で重心を下げて安定したフォルムからなる。

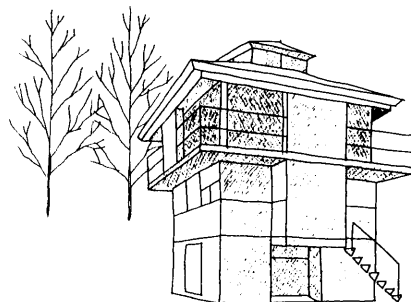


図-2.20-2 自然と対峙するフォルム

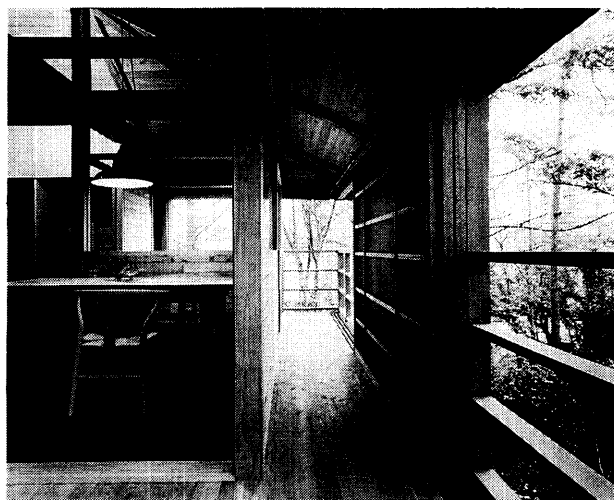


写真-2.20-2 回廊より梢を望む（森本山荘）

2.21 エレメント

—富士の裾野の山荘

駅前や高層ビル街の中に小さな交番を設計していて、マクロな視点でみた時に、その規模からいって建築というよりもランドスケープの中のオブジェか照明器具のようなスケールであることに気がついた。特に交番は昼夜をとおして活動しており、街が眠りにつく夜間に投げかける暖かな明りは、人々を安心させてくれる意味で重要な役割を果たしている。それは単に照度を満たすばかりではなく、明りの質や室内を反射板としてつくる明りの形をデザインすることでもある。

次に建築の中に入ってみると、その空間のイメージを表現するのにふさわしい素材の選択や納めかた、といった沢山のエレメントの集積によって方向が示される。1つ1つのエレメントをとってみても全体のイメージが見えてくるようでありたいと思う。

1つの建物の明りの計画について取り上げてみる。この山荘のコンセプトは人を迎える形を探そうとしたものである。都会では戸締まりに気をつけ、まず玄関で訪問者を選別しなくてはならないが、山荘では訪れる人といえば見知った人が立ち寄るくらいである。そんな時、日常の喧騒を避けてくつろぐ中で待つことを楽しみ、ヤアヤアと視線を合わせて手を振ってあいさつを交わす情景や、無人の建物に家族が到着した時にどのようなでありたいかなどをイメージしながら設計を進めた。



写真-2.21-1 パーゴラから日が差し込むテラス

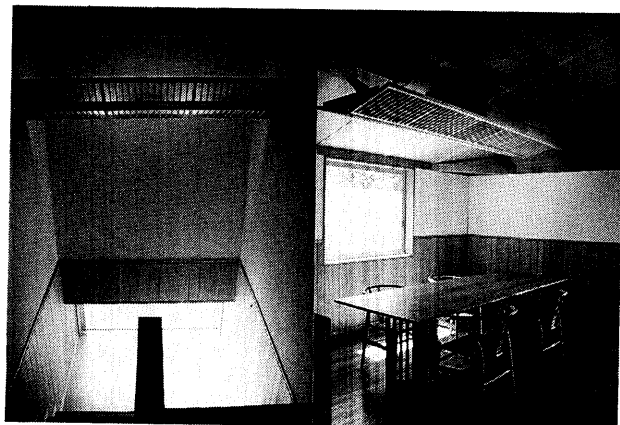


写真-2.21-2 階段ホール（左）と食堂（右）の明り

○道路から長いアプローチをとって建物を配置する。その間、小路に沿って向きを変える外灯から細く長い光のラインが低く流れる。コンクリートの土台の上に板を組み合わせた照明は、単純な仕組で素朴に周辺環境に馴染む。

○建物に囲まれていながら明るく日が差し込むテラスには人影が見え、迎えてくれる。夜間はパーゴラに吊した小さな明りがいくつも集まり、ぼんやりと全体を照らす。外部用になるとヘビーデューティに構え、ごつくなりがちなのをシンプルに軽くつくって散らす。

○縦長のプロポーションの階段踊り場には、昼間は足元を明るく照らすよう出窓から採光を取り入れ、夜は上部に2つに折った障子を掛け渡して折り鶴のような明りをつくる。

○食堂の机の脚部や照明も同じ様な格子で展開する。ここでは照明の一部に換気扇を組み込みダクトを隠す。

縦格子をY字に組んだ脚部もすべて建具屋の手による。

空間に合わせて外光の取り方を考え、光をデザインするのも夜間の照明を計画するのと同じこと。特別な技術やノウハウを駆使するというよりも、簡単に手に入る材料や身近な職人さんの技術を利用して考えてみる。プロダクトデザインとして一般化し、不特定多数を対象とするのとは違って、特殊ではあるがローテックな分、安価に計画し手に入れることもできる。

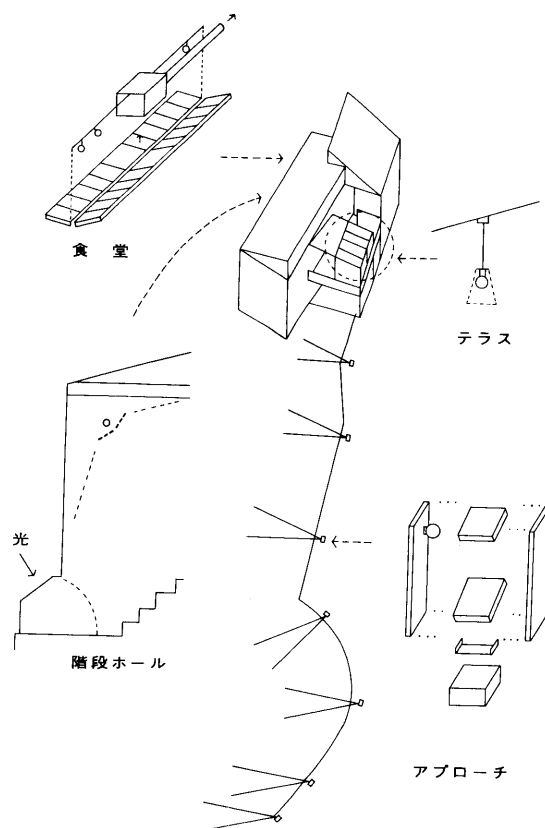


図-2.21 山荘の明りの計画

3. ケーススタディ

都市に住もう——個人の特殊解であっていいはずの住宅に対して、いつしか同時に同じパターンで繰り返されても成り立つ計画であって欲しいと考えるようになっていた(図3-1)。それは、周辺環境に依存することなく厳しい条件の中で自立した空間を作ることができれば、それは同じものが並んでも成り立つということであり、始めから集合住宅を計画するのとは違うルートを取りながら結果として高密度な住宅地をつくることになり、目的は同じではないかと考えたからである。

羽沢の住まい(2.2, 2.10, 2.18参照)——このプロジェクトは、私有地でありながら街並に開放するような形で、アプローチと駐車スペースを緑地として複合させながら計画した。交通量の多い環七際の曲がりくねった狭隘道路きょうあいという環境の中で、建築と余白のつくり方はその敷地の中で完結するのではなく、開くことによって自立できるのではないかと考えたからである。建築をつくる工事手順、奥の庭の手入やメンテナンス、あるいは改造・増築への可能性などへの検討の結果でもある。

工事以前は、羽沢の住まいほか数軒がセットバックする以外はせり出したままでこぼこした通りであった。同時期にもう一軒竣工したこともあって、その後一斉に境界を後退し、4mの道巾に整備されることになる。しかし、この一帯は、幹線道路や駅近くで便利なことから、土地の細分化が進み、高密度と共に道路はますます猥雑化している。

街並再編——1968年(図-3-3)の住宅地図と現況調査図(1995年)を比較してみることにする。変化の内容は環七が開通し、用水が埋められて道となり、地下鉄の計画に伴って教会が移動して公園となる。交差点付近の建物は高層化し、その他、住宅も建て替わると規模や階数が増えて中層化や集合住宅化している様子がわかる。また、地価高騰による相続対策か、宅地が小さな公園に

変わったところもある。総合的にみれば、これらは交通の便が良くなる一方で住むための土地を手に入れることの困難さから起こる現象であって、その流れに対して新しい提案があるわけではない。しかし、1つ1つの建築の計画に際して住民が共有するコンセプトを持とうとするなら安全で魅力的な街並となって、やがて個の空間を豊かにするものとなって返ってくると考える。

そこで、これまで設計した住宅を道路付や方位などなるべく尊重しながら既存の住宅地の中に置き換え、硬直化しつつある街並に刺激を与えてみる。更に1400㎡程のエリアを対象として、場当たりのできてしまった街並の再編を検討することにした(図3-2, 4, 5, 6)。対象として選んだエリアはもとは一敷地であったが一棟づつ建築を重ねていくうちに接道されてない敷地や建物ができ、その一方で道に囲まれた離れ小島の落ち着かない宅地もある、という場所である。

公園住宅——計画案は隣接した公園を取り込んで計画する。現在、この公園は通り抜けできず囲まれているが、住宅地との間の堀を除くことによって、庭などの余白をつないで裏の動線をつくる。更に公園として小さく完結するのではなく公園のような住宅地をつくるために自らを開放し、家並をつくる。つまり、計画地を南北2つのブロックに分け、間の道を公園の中まで通し、通り抜けできる道とする。ただしスピードが上らないよう樹木を植えてカーブをもたせ、ゆったりとした景観をつくる。

再生への布石——集合住宅はウベ城山台で試みた工業化住宅と在来工法(今回はS造とする)を組み合わせ(2.1 PCパネル 参照)、軒高をおさえて配置計画の可能性を広げ、また、PC版構造の30畳一室空間を利用して将来の改造や手入れの可能性によって、生き続けられる建築を提案することにした。現状は21世帯58人でこの密度は維持しつつ、車庫を半分くらいは確保するよう目標を立てた。

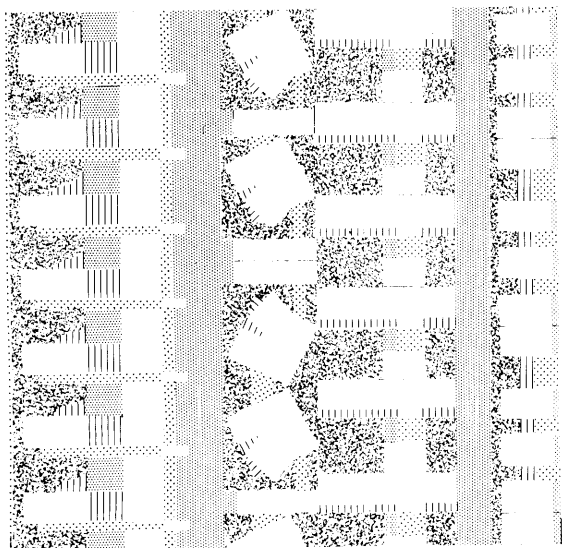


図-3-1 個(実施作品)を綯いだ戸建集合

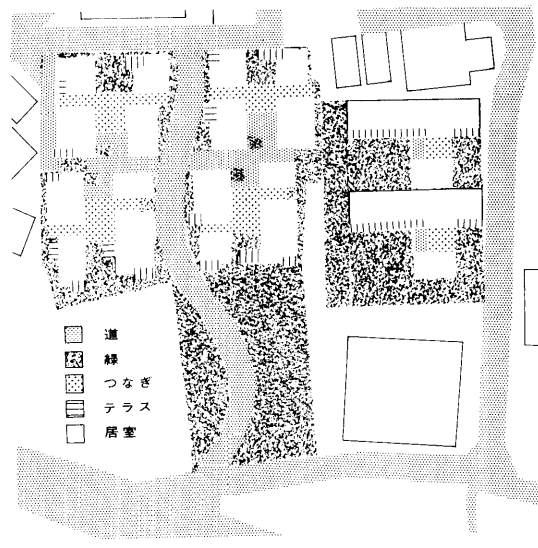


図-3-2 個から街並へ・羽沢地区のケーススタディ

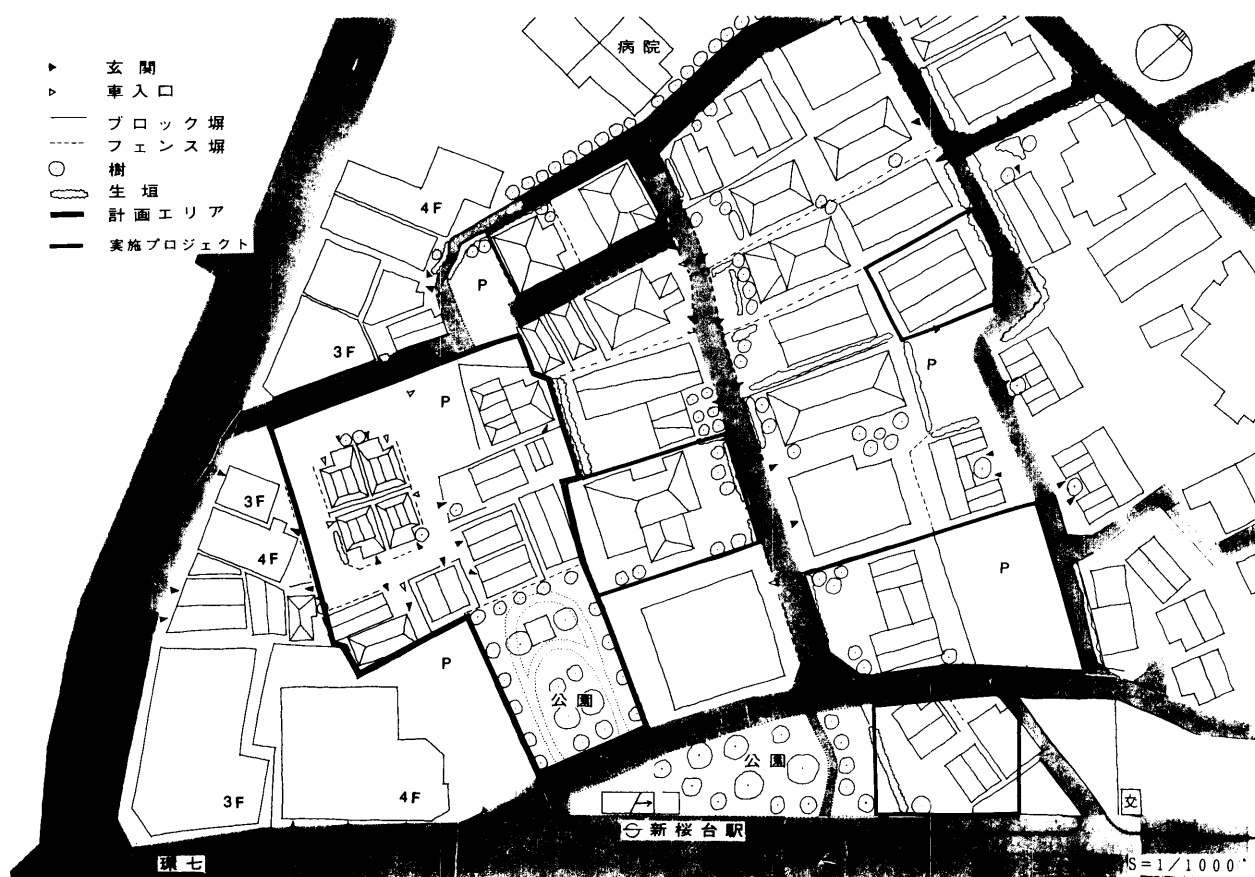


図-3-3 羽沢地区の移り変わり（上：1968年住宅地区・下：1995年住宅地図に現状調査を加える）

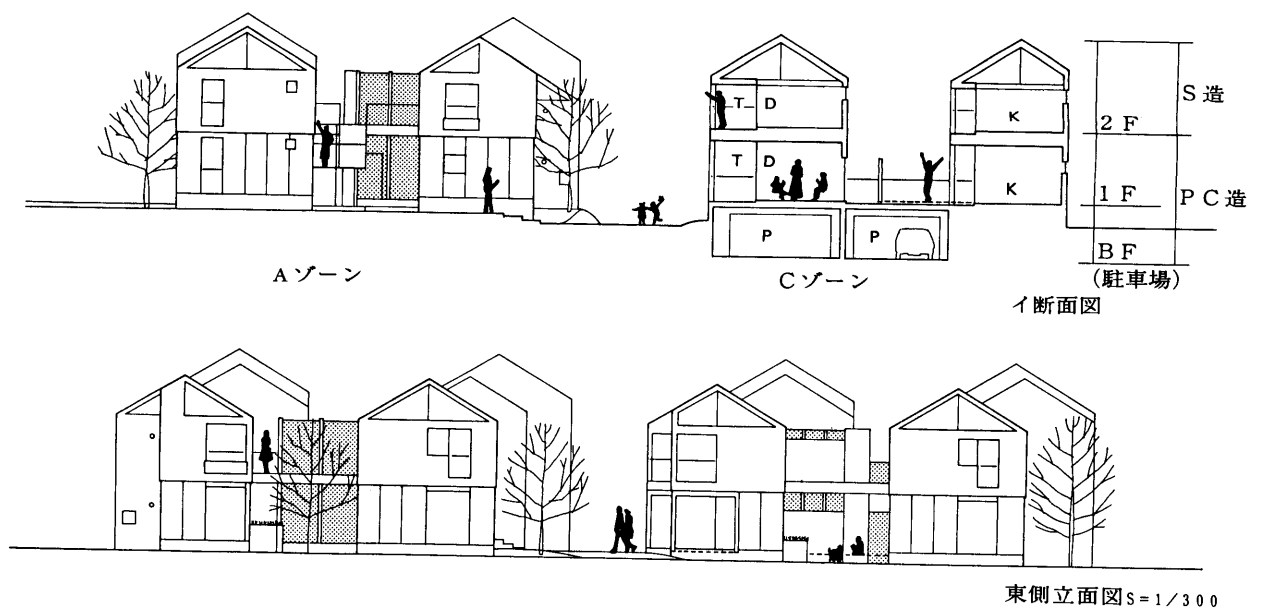
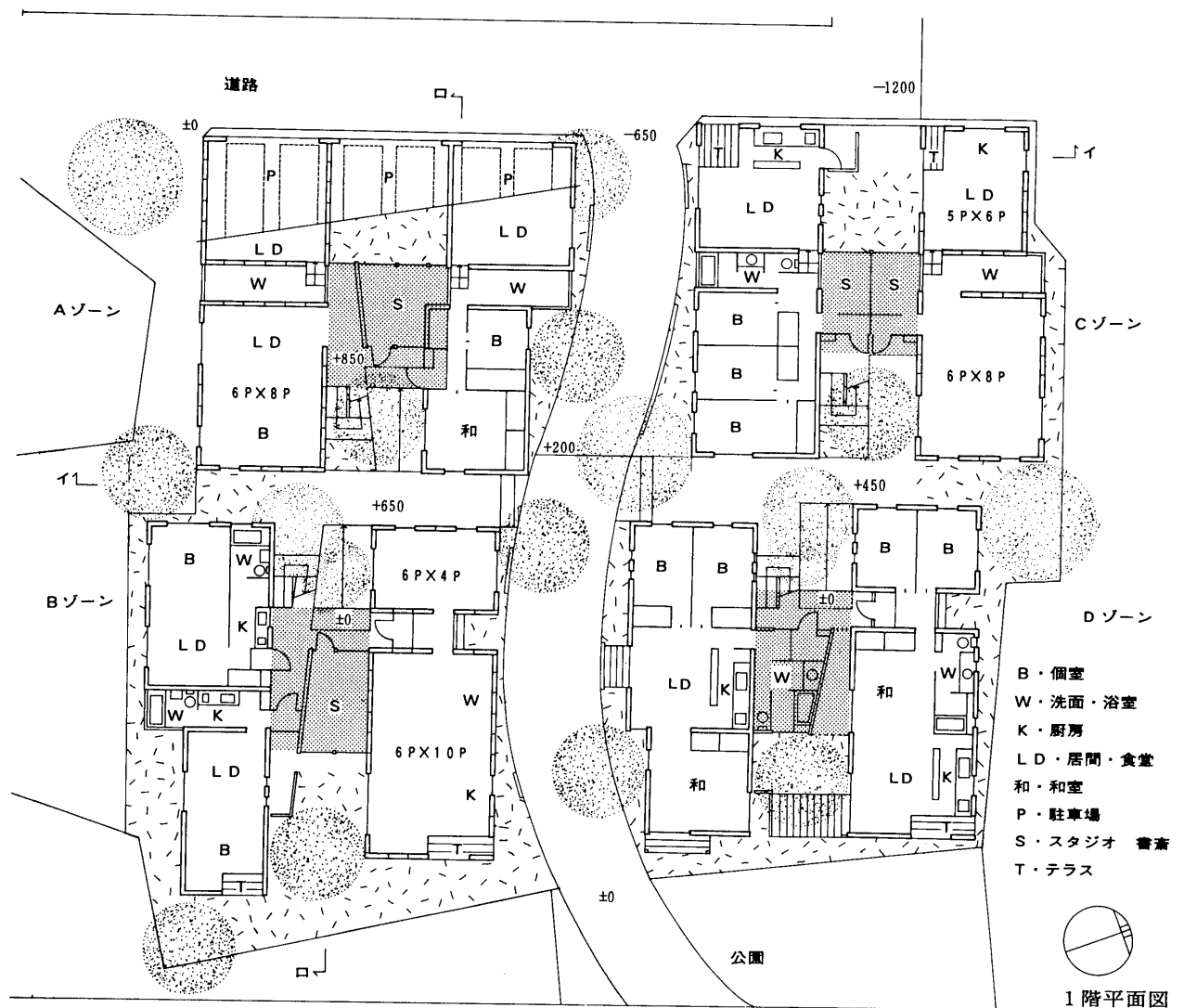


図-3-5 羽沢地区のケーススタディ・PC(1F, BF)+S(2F)の混構造による集合住宅

4. まとめ

小公園の可能性——小公園は現在のところきれいに植樹されているものの、囲われているため、案外通りすがりに人が訪れる風でもなくあまり人影がない。むしろ街並に開くことによって、人の目が行き届いて賑やかになり、安心していられる場所として気軽に利用する機会を増やせると考えた。子供や老人、そしてペットをつれて憩い、通勤や通学、買い物への行き帰りと、様々な人々が時間を問わず、それぞれの楽しみかたで日常的に親しめるような公園。それには囲いを開いて計画エリアの道とつなげ、住宅地の塀を除いた計画の延長線上にとらえる。公園がパブリックなものであればこそ、そういったことができるようになればと思う。

概要——住宅は、隣接地が近隣商業で中層化する傾向にあるAとBゾーン南側ブロックに約40㎡のシングル用を1・2階合わせて8戸計画する。その他は約80㎡のファミリータイプで1・2階に分かれたフラットを計12戸、総居住者数は60人を想定する。

敷地西側の狭隘道路を広げ、敷地とのレベル差1.2mを利用して車庫をとるようAとCゾーンの西側ブロックを半階あげて計画する。各ゾーンの南北住棟の間は共有スペースで動線や入口、そして各住居とは独立した+αの空間を設け、アトリエやスタジオなど多目的に使える場所をつくる。各ゾーンは真中を抜けるカーブの道に合わせて軸をかえて連続し、整然とした一体感の中に細かなひだを織り込み、変化のある景観をつくる。思い掛けないところで視線が抜けたり、出会ったり、人の気配を感じるようでありたい。

暮らしと住宅のストック——戸外の空間へ生活がこぼれ出し、暮らしているエネルギーが感じられるような街並に魅力を感じるのはなぜなのか。そこには住む人が空間と関わることで積み重ねた時間や暮らしがあるからである。関わる人々の個性やスタイルはその時代によってつくられる。そうして伝えられる何かがあって空間にリアリティが出てくる。それにはまず建築が生き続ける状況をつくらなければならない。集合住宅であっても、住む人に合わせて作り続けていけるような要素を盛り込み、

一方で住み手がその時々スタイルに合った空間を求めて移り住むことができるような住宅のストックと、モノではなくスタイルにこだわる思想を持つことが望まれる。

環境への責任意識——自と他、内と外、私と公共（社会）の境をいかに仕切り、繋げ、作るかの提案は、周辺環境に期待せず、せめて自立できる空間を計画していこうといういわば自衛のための手段であり、個からの出発であった。しかし「環境への責任意識」という表現にはもう一歩踏み込んで、住民同志の働きかけで何かの方向を示すことができる可能性がある。それは必ずしも法律で定めるのでも、すでにそこにあったというだけの既得権を尊重しなくてはならないのでもない。1つ1つの住宅は、それぞれ思い思いに個性的であり、カオスであっていいのだが、少し遠くに視点を移したときに街並としてポジティブな形が見えてくるような計画を指している。つまり個々の提案の中にそういった方向を示す芽を意識的に仕組んでいくには、自分の自由を守ることは他の自由を尊重することであるといった考えと、美意識と気持のゆとりを持つことで、時間をかけて形に育てていくものとする。

個から街並へ——そして今回公園を開放することから始まったこの計画のように、公園のための公園ではなく、公園のような住環境をつくるために、私有地からどのような提案を引き出すことができるか公私の垣根をはずすことから始めなければならない。様々な視点から共有できる何かを築くこと、機能主義を遇進したモダニズムでも、表層や遊び、歴史回帰としてのポストモダンでもない。黙示録として埋め込んだ断片的な余白（緑影がつくりだす環境も含めて）がこだましながらゆっくりと返ってくるようでありたいと考える。

参考文献

- 1) 在塚礼子：老人・家族・住まい 住まいの図書館出版局 92.8.10
- 2) 鈴木博之：夢のすむ家 20世紀をひらいた住宅 平凡社 89.8.10
- 3) はぎわら文庫編集委員会・編：萩原の着物と住まい 岐阜県益田群萩原町教委 82.11.3
- 4) 有元利夫：日経ポケット・ギャラリー 日本経済新聞社 91.12.12

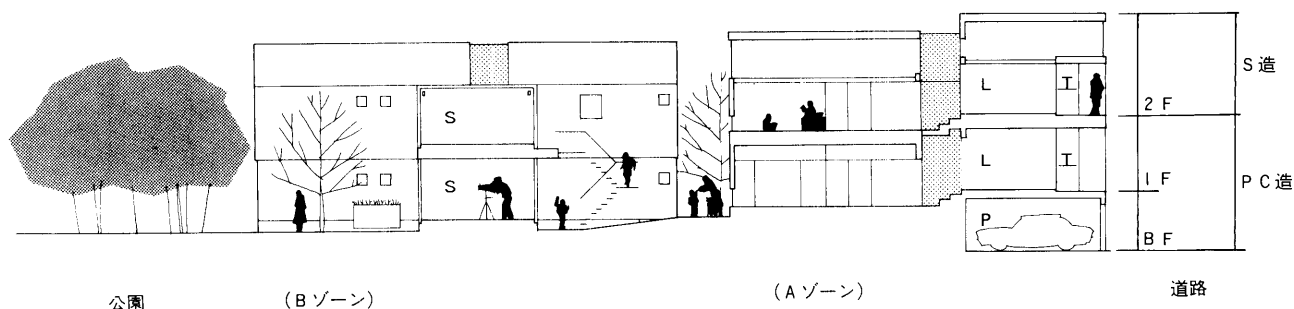


図-3-6 羽沢地区のケーススタディ・PC(1F, BF)+S(2F)の混構造による集合住宅